

渡部 栄八  
有述

啓蒙

詞のたつき

一

811.

W58k

077153-001-1

811-W58k

詞のたつき 1, 2の巻

渡部 栄八 / 著

M8. 4

DAC-0342













十 五				
ナ	タ	サ	カ	ア
ニ	チ	シ	キ	イ
ヌ	ツ	ス	ク	ウ
ネ	テ	セ	ケ	エ
ノ	ト	ソ	コ	オ

音 連				
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ
ヰ	リ	イ	ミ	ヒ
ウ	ル	ユ	ム	フ
エ	レ	エ	メ	ヘ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ



司ノハシハシ  
田ノナ  
四

平 假 名

な	た	る	へ	い
ら	れ	を	と	ろ
む	ろ	わ	ち	は
う	つ	か	り	に
お	ね	よ	ぬ	ほ

音ノ清濁  
清濁音

濁 音 別 清 音

パ	バ	ダ	ザ	ガ
ピ	ビ	チ	ジ	ギ
プ	ブ	ツ	ズ	グ
ペ	ベ	テ	ゼ	ゲ
ポ	ボ	ト	ゾ	ゴ



波 呂 伊				
セ	み	あ	け	の
す	し	さ	ふ	ね
	ゑ	き	こ	く
	ひ	ゆ	ね	や
	も	め	て	ま

蒙啓 詞のきつき

目次

一の巻

- 第一 直音
- 第二 發音
- 第三 拘音
- 第四 濁音 并半濁音 別清音
- 第五 僻音
- 第六 平假字



第七

偏假字

第八

音訓句讀

二の巻

第九

字音の及

第十

詞のはとらき

第十一

てふをは

第十二

假名つらひ

啓蒙

そつき一の巻

若招 渡部榮八著

ヤヨ 兒曹 ヨいつとく 言ひ聞う 候る如く

この小學ふ入りて物學ぶうらハ五大洲中の書を兼ね学ば天地萬物の理を究めて終るハ世の為め國のよめ大なる功業を成さんと高尚なる志として勉め勵む可きハ言ふ迄もかけれど高きよ登るハ必ひ卑きより速きよ行くハ必ひ速きよりする習ひか

同の巻



れバ先づ雅き程より家と手近き此身は具  
はりたる音と其音より生れる詞と其詞の  
活用とを能く知り辨ふべし

○第一直音

この壁間の右は掲げたる五十連音といふ  
ものハ其音と詞の活用とを人々よ知らし  
めん手着よとして師範学校よて板よ彫られ  
しかりこの我國神代より傳はり來て一説  
は偉大は臣は往て我國の語を具はし時  
は人よ就て我國の語を具はし時王は化  
は人よ就て我國の語を具はし時王は化

化玄其音を直しアイウエオカキクケコ  
寺の相通を立て大臣は傳へたるかりと  
いへど信其音唇舌牙齒喉の開合よ志と  
ひて是るるかりこハ即て支那の所謂宮  
商角徵羽の五音よして我人とも哭くと  
笑ふと物言ふと歌うとよと此音は漏る  
ことかく此音のことく交はり何やか  
て詞とかり其詞の活用を口よ唱ひ文よ  
書て互よ思ふ意をのべ得るかり  
先づ始の行を縦よよわバ



ア イ ウ エ オ

この五の音ハ母音コエノオヤとしてこれより末スエの四十  
五の音を生コホモ試シよ余ヨレと同音トウオンよ唱ナゲてこよ其  
音ネいづれも本モト末スエよ響ヒビくかり

第一アの字の行クダリを横ヨコよ

アカサタナハマヤラワ

第二イの字の行を横よ

イキシニヒミイリキ

第三ウの字の行を横よ

ウクスツヌフムユルウ

第四エの字の行を横よ

エケセテネヘメエレエ

第五オの字の行を横よ

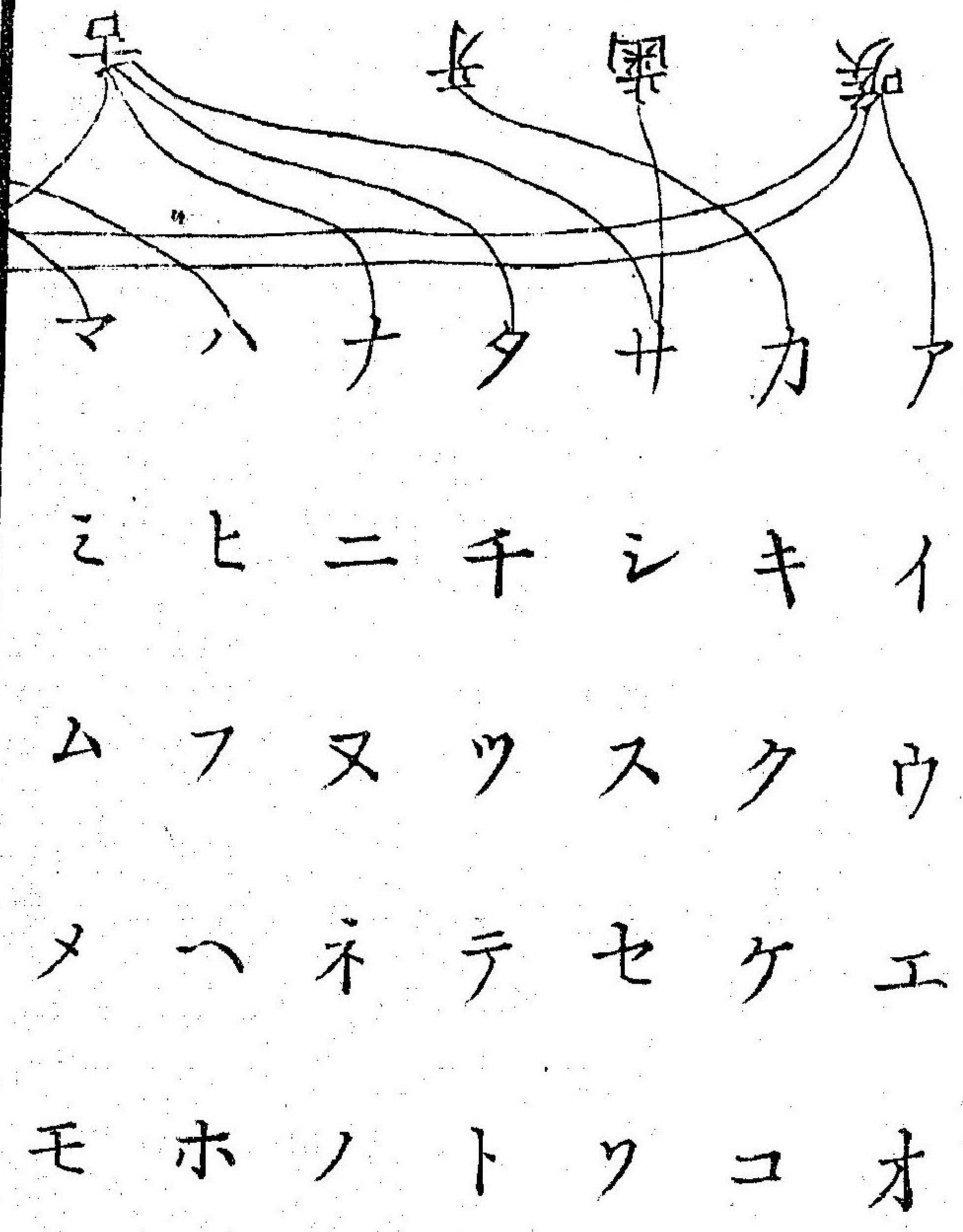
オコワトノホモヨロヲ

この四十七音イウエの同音を除きていふを直音ナラヒナよと促セ  
音ネよといひすかやよしてつツまりよる音  
かり

○第二發音



さて又此音を發以るや其觸る所唇舌牙  
齒喉の五の別と開合の異かるとを示さん



開 — ハ ヤ  
 開 — キ イ  
 合 — ウ ル  
 開 — エ レ  
 開 — フ ロ

此圖の上は書添はる如く喉は觸れ  
 て出る音齒とハ齒は觸れて出る音牙とハ  
 牙は觸れて出る音舌とハ舌は觸れて出る  
 音唇とハ唇は觸れて出る音かりこの上の  
 書添の文字と織線とを見合せ又余と同音



よ唱て云よ

第一喉の字の線を縦よ

ア イ ウ エ オ

ヤ イ ユ エ ヨ

ワ 牛 ウ エ ヲ

この三行ハ喉音として即ち喉に觸れて出る

音かり

第二牙の字の線を縦よ

カ キ ク ケ コ

この一行ハ牙音として即ち牙に觸れて出る

音かり

第三舌の字の線を縦よ

タ 千 ツ テ ト

ナ ニ 又 ネ ノ

ラ リ ル レ ロ

この三行ハ舌音として即ち舌に觸れて出る

音かり

第四唇の字の線を縦よ



ハ ヒ フ ヘ ホ  
マ ミ ム メ モ

この二行ハ唇音として即ち唇は觸れて出る音なり

第五齒舌の二字の線を見合せ縦よ

サ シ ス セ ソ

この一行ハ齒舌音として即ち齒と舌とよ觸れて出る音なり

又圖の左側は書添たる如く(アイエオ)の行

を横よ唱ふるハ開きて口を開きて出は音  
〔ウ〕の行を横よ唱ふるハ合として口を合せて  
出は音なり此圖の左側は書添たる文字を  
見合せ又余と同音よ唱てよ

アカサタナハマヤラワ  
イキシチニヒミイリキ  
エケセテネヘメエレエ  
オコツトノホモヨロヲ

いづれも口を開きて出は音なり







こはいづれの行と(○□△▽)のーるーの如  
く(イキシ千ニヒミイリキと)ヤイユエヨ(ウ  
クスツヌフムユルウ)と(ワヰウエヲ)の音を  
経緯は組合せて斯る音とかり又此拘音を  
反よて約ればととの直音とかるかり支那  
よて漢音吳音かどく其時代よよりて文字  
の音の移り来れるも皆この五音の相通よ  
り変れるものよして我國の詞を此音の通  
ひより古と今と変りたるもの多し

○第四濁音別清音

次は壁間の中よ掲げたる濁音と別清音  
いはる濁音は即ち清音よして此圖は掲げ  
たる濁音は清音よとる音かれば今假よ別清  
音と別清の圖を説き示はべし  
濁音とハ濁りたる音半濁音とハ半バ濁り  
たる音別清音とハ特よ清よとる音よして  
物言ふよと文書くよと缺く可うらざると  
のかり

濁音ハ凡て假名文字の右側よ(ス)斯く二の



點を添ツて清音別清音及ひ半濁音マカと紛マカハぬ  
やう區別クバツセリ兒曹チカダチの日々讀ヨむ所フミの書フミよそ  
此點ニ何ニる文字ハ濁ニりて讀ニむものト心得トべ  
—又余トと同音トよ唱トてトこよ  
第一始タテの行タテを縦タテよ

カ キ グ ゲ ゴ

いづれニも濁ニりトる音トよトして和語ワゴかれバ

ト答ガム  
ネ勞キラ  
ウ掛グム  
シ繁ゲシ  
ウ蠱ゴク

漢語カレゴかれバ

我ガ慢マシ 議ギ論ロン 愚グ癡チ 下ゲ品ヒン 誤ゴ認ニン

かどの類カかり

第二ツ次タテの行タテを縦タテよ

ザ ジ ス ゼ ヅ

和語カかれバ

キ崩サス ナ詰ル カ必ナスセ憂クル ノ除ク

漢語カかれバ

坐ザ興キヤウ 自ジ負フ 隨ズイ分ブン 是ゼ非ヒ 增ゾウ減ケン

かどの類カかり



第三次の行を綴よ

ダ チ ヅ デ ト

和語ふれば

サ<sup>定</sup>タム ハ<sup>耻</sup>チ ニ<sup>洗</sup>ツム ツ<sup>序</sup>イデ イ<sup>挑</sup>トム

漢語ふれば

懦弱<sup>ダ</sup> 治<sup>デ</sup>定<sup>ギョウ</sup> 杜<sup>ツ</sup>撰<sup>ゼン</sup> 傳<sup>デン</sup>授<sup>ジュ</sup> 讀<sup>ドク</sup>書<sup>ショ</sup>

かどの類かり

第四終の行を綴よ

バ ビ ブ ベ ボ

和語ふれば

サ<sup>羽</sup>ハク サ<sup>淋</sup>ヒシ ツ<sup>眩</sup>フセタ ス<sup>凡</sup>ベテ ノ<sup>昇</sup>ボル

漢語ふれば

莫<sup>ボク</sup>大<sup>タイ</sup> 美<sup>ビ</sup>麗<sup>レイ</sup> 豊<sup>ブ</sup>饒<sup>ネウ</sup> 辨<sup>ベン</sup>舌<sup>ゼツ</sup> 模<sup>ボ</sup>範<sup>ハン</sup>

かどの類かり

又半濁音とハ

曰<sup>イハ</sup> 即<sup>ソコ</sup> 家<sup>カ</sup> 鼎<sup>テイ</sup>

かどの如く言の下に〔婆〕を〔和〕の如く〔倍〕を〔延〕の如く唱ふるの類かり



別清音ハ凡て假名文字の右側カタクに〔○〕斯カクく圓マ點ルを添ソて清音及ひ濁音半濁音と紛マハぬや  
 う區別クバツせり兒曹チゴダチ日々讀む所の書シの書シの  
 圓點マルある文字ハ殊トは清スきて讀むもの心  
 得べし此音和語ワゴハ稀マレよしと西洋語セイヤウゴハ多オホ  
 し又余アレと同音トウオンハ唱トナてこよ  
 ハ。ヒ。ポ。ペ。ホ。  
 いづれを殊トは清スきとする音よしと西洋語セイヤウゴハ  
 殊トハ

ハ。麵包  
 ヒ。拳銃  
 フ。三稜硝子  
 ペ。金油  
 ホ。御筒

漢語かれバ  
 一般 一品 一介 一篇 一本  
 一ツバ 一ツピン 一ツペン 一ツポン

○第五僻音

右ミに説トキ示シせる種々の音ハ人々ヒトは具ツハりさ  
 るものかりさして此音の交マわりやかして  
 詞コトバとかり思オモふ意コトバをのぶるものかれバ先マづ  
 第一ダイイチハ此五十音を僻ヒカまぬやう正タダしく讀ヨミ習ナラ



ひ縦行よも横行よも諸誦以べ一方言として  
詞のかより何處よとらる習ひかれど音  
僻めバ言の意聞取り難一余が經歷せ一所  
をそて思ふよ兩羽三陸の地かどハ其音殊  
よ僻めり中よも

「イトユ」「シトス」「ジトズ」「チトツ」

「チトツ」

これ等の音混淆して聞分難一ととへバ

「伊呂波ヲユロハ」「岩ヲユハ」

かどの類其他

調ヲスラベコ 角觥ヲシマフ

自慢ヲズマン 智慧ヲツエ

杖ヲチエ 持赤ヲツトヤシ

約ヲチマヤカ

咒術ヲスヅン 循環ヲズンカン

忠臣ヲウースシ 通信ヲチースレ

策略ヲシヤクヤク 給仕ヲキーズ

十両ヲブーヨウ



と唱よるの類数よるは違はらば只音の斯く僻ヒガゆるの之からば習慣性ナラヒセとかりて村夫子ムラフジともいひるゝ人の漢語カンゴまじりの文章ブンシヤウかどよ

〔都下トカいラ且カチ此カノ如ゴトス〕

かど書カキく人多オホ一又東トウ西サイ京キヤウの文明ブンメイは誇ホコる人氏トシナリ中ナカよも〔七シチ〕を〔七シチ〕といひ〔火ヒの用心ヨウシン〕を〔シノヨウジン〕かど唱ナメよる者モノ少オホクらば近チカ来キヨ人の門カド口クチよ

〔此コノ内ウチ紙カミ屑クセトろい木キトろい入イル可ベガらば〕

と札フダを掲カげとり何ナニの事コト々余オノ輩レラはハ解ゲ一難ガク一又近チカ来キヨ刊カン行カウの書シヨよ

〔此コノ吃キツ〕 〔函カン〕 〔絶ツツ倒タウ〕

かどの假カ字ナ見ミえとり又マタいろはイロハるルといふものよ

〔むりごとふらバ道理ドウリトつこむ〕

〔るりももりもてらせバトる〕

これ等童蒙ドウモウを教カシふるものかるよ斯カる僻ヒガ言ゴト



をーるせり通音ふれば咎むべきも何らば  
といふ人も何れどそは遁辞といふものか  
り幾度といふ如く音より生れる詞とて思  
ふ意をのぶべきものなるよ其音少く僻  
めバ事を誤り大に僻めバ思ふ意を達し得  
ざるこし此の如し故に先づ此五十音を正  
しく唱習ふべきふり

○第六平假字

さて此壁間の左に掲げざる假名文字とい

ふものハ其音の目づる一かれバ其原由を  
能く心得べし此平假名伊呂波歌ハ僧勤操  
と僧空海（法海）と相議りて涅槃經とい  
ふ佛書の四句の偈の諸行無常といふ意を  
和語よ翻譯して同じ文字かき四十七字の  
長歌とかし其音の漢字を書き和らげて斯  
る文字を製りしといふ志ありしより世よ  
傳はりて偏假字よ對へてハ之を平假字と  
いひ單よ稱へてハ之を假名文字又ハ國字



と女文字ヲメナモシともいひて世アモネは普く之を用う  
 る事とハカかれりナ「假名」といふ義ハ我國の音  
 をしるカハ目メじりリハ假カリハ漢字の聲コエ勻エを用  
 て事物コトモノハ名状ナナウくるの義ワケハ即ち假名カリナの略リョク  
 「平」とハ平常ツツネの義ワケハ別ベツハ偏假名カクカナといふと  
 の所トコロハ故ユヱハこれコノハ對タガヒへてつねの假名カナ  
 いひヒとけケとるルかり今其文字の原モトを示シさん  
 一同石盤イソクキバンを出イして之ノを書取カキるべし  
 伊イ 呂ロ 波ハ 仁ニ 保ホ

反へ 土と

此「い」の字ハ「伊」の字ニハ似通カヨハざるやうニ見  
 られどレそハ字彙ジといふ書シヨハ佛書ブツシヨの伊イの字  
 ハ草書サウシヨの下ゲの字ノ如ニしと見えて佛書ブツシヨハ  
 「六」斯イくカしカるルしシとトりリ此假字カナを製ツクりリハ皆佛  
 徒カかれバ即ち佛書ブツシヨのイの字ノを用ユて上ウの一  
 點テを省シきキとるルかり又「へ」ハ「皿」ハ止トの略リョク  
 いふ人ヒトもモ何ナニれど「皿」ハ古書コシヨの假字カナハ見えミば  
 「止」ハ訓コトかり伊呂波歌イロハカハ字ジの聲コエ勻エをウりリて



訓をまじへざるよーハ古くよりいひ傳ひ  
されバ〔へ〕ハ反の略〔と〕ハ土の略字とるこく  
疑ひかー

知ち 利り 奴ぬ 留る 遠を

和わ 加か

興よ 太た 礼れ 曾そ 圖つ

祢ね 奈な

〔つ〕ハ圖の略かり世俗門の略字と改るハ非  
かり

良ら 武む 干う 為わ 乃の

於た 又く

也や 末ま 計け 不ふ 己こ

衣は 天て

〔衣〕ハ衣の略かり衣の音と江の訓と同一く  
又略字かれバ字形を紛ひ易きが故に此假  
字を全く〔江〕の字と以る人多けれど訓を交  
へざるこーハ前よをいへる如くかれバ衣  
の字とるこー疑ひかー



安あ 左さ 幾き 由ゆ 面め  
美み 之し

〔め〕ハ面の略〔あ〕かり世俗女の字と似る者何れど女ハ訓かれバ用うべうらば又妙の字と似るを誤かり

恵ゑ 比ひ 母も 世せ 寸す

〔も〕ハ母の草〔毛〕かり〔毛〕よりらば右よて平假字の原字を知り得ざるべいと歌の意ハ瑣々一けれバらうと説りば兒

言やぐて詞の活用と漢語とを知り得ん後涅槃經の偈といふものよ合せて此歌を誦味へかバ其意自ら明瞭かるへい

○第七偏假字

さて又偏假字ハ孝謙天皇の御代吉備大臣真備といふ人唐よ行て經史軍術をとり衆藝を綜べ學ばれ帰朝の後鈔書等よ便せんとし真草の字の偏傍等を探りて斯る文字よ製られとりといふ簡便よして我人と



とよ書易く又讀易きが故よ今ハ外國の人  
も之を知得て世の用を為以こく少々らば  
偏假字といふ義ハ漢字の偏傍冠履等の點  
畫のうちいづれう一隻を採りて裂れるも  
の故偏假名とハいふかり今其文字の原を  
とよ示さん又石盤を出して之を書取る  
べし

伊イ 呂ロ 半ハ 仁ニ 保ホ  
反ヘ 土ト

此文字の白き所ハ即ち偏假字かり以下之  
よ倣へ

知千 利リ 奴又 流ル 遠ヲ  
和口 加カ  
與ヨ 多タ 礼レ 曾ッ 草の門  
祢ネシ 奈ナ  
良ラ 牟ム 字ウ 韋キ 乃ノ  
於オ 久ク  
也ヤ 末マ 介ケ 不フ 巳コ



衣 エ 天 テ

阿 ア 散 サ 草の幾由 ユ

美 ミ 草の之 草の幾由 ユ 草の面

惠 エ 比 ヒ 毛 モ 世 セ 須 ス

此他世は用お来れるハ

コ ト ト モ ト キ 片 シ テ ヲ

いづれも二の假字の畫を省きて一は合せ

さるかり又

无 ン

无ハ無の古字ふれば〔无无武牟〕皆同假字よ

て ン ト ト ム 音異かりとほるハ誤かり又

〔チ 〕 〔ハ 〕 〔ツラ 〕 〔ユメ 〕

〔ち 〕 〔は 〕 〔つら 〕 〔ゆめ 〕

偏假字よも平假字よも斯く同一音の一つ

續く所よ〔 〕一點二つを繰反以所よ〔 〕二點

を用うこハ漢籍よ同字續くとときハ上と同

字を二つといふ一は〔聯ニ〕斯く小き二

の字を用るよ做いさるものかり又偏假字



詩の巻の巻  
の音を延る所よ

〔千〕〔ハ〕

かどーるは〔一〕ハ上の音を引延るといふー  
るーよーて文字よハ何らば  
きて音と詞とよ關りさるこゝからねど先  
哲の文字を評しさる語よ真ハ行を生じ行  
ハ草を生じ真ハ立つが如く行ハ行くが如  
く草ハ走るが如く未ど立つこゝ能ハば  
て能く行き能く走る者ハ何らばといふこ

と何り兒曹筆道を學ばんは家初伊呂波の  
平假字を習ひ次よ偏假字よ移り此偏假字  
ハ真字の筆法よ近ければ能く書習ひて習  
字初歩の順序の如く真の數字幹十枝十二  
より日本國盡ふどよ移り猶も真字を書習  
ひ立つが如きの筆法を得さる後漸次行草  
篆隸等の體よ及ぶべしこハ偏假字よつき  
て思ひ出さる故いひ聞うはるかり

○第八音訓句讀



さて又兒曹チゴタチ日々讀む所の和漢ワカンの書籍シヨジヤクを皆ミナ音コエより生ナれる詞コトを思オモふ意ココロを書カキつゞりたるものモノのカるルが之ノを讀ヨクまんハ先マづ文字モジの音オン訓キンと文章ブンシヤウの句讀クトウとを辨ワキマふべし音オンハ「コエ」かり訓キンハ「ヨミ」かり一ヒト口クチよイへバ音オンハ漢語カラコトバのナまマ訓キンハ和語ヤマトコトバと譯ヤクしスるカり此處ココを學ガク校カウといへバ音オンかり「モノ」マナビトコトといへバ訓キンかり其處ココよウる品シヤク々クを「筆墨紙」といへバ音オンかり「フデ、墨、カミ」といへバ訓キンかり

兒曹チゴタチ勢セウよル所トコロの漢文カンブンの書籍シヨジヤクを此處ココに持モチ出デて繕ヒロげてマよク日本外史ニッポンガイシ卷クワン之一ノ第一葉ダイイチエフ

吾讀舊志ワレヨムフルキフシ といへバ音オンかり

吾讀舊志ワレヨムフルキフシ といへバ訓キンかり

源平二氏ゲンハイニジ といへバ音オンかり

源平二氏ゲンハイニジ といへバ訓キンかり

又句讀クトウといふコトはハ一イツ章シヤウのウち一イチ語ゴの絶タユる所トコロ々クをいイひ讀トウとハ一イツ句クのウちよテ語絶ゴタエざれども語意ゴトノコト紛マギれぬチウツ點テンを添ツへ



誦詠ヨム又便タリ以リるをいふ又此書ヨて指サし示シさん

外史氏曰。吾讀舊志。見鳥羽帝時。數下制符。禁諸州武士屬源平二氏。曰木權之歸將門也。其在此時歟。

此コハ句クかり一ハ讀トウかりウ初学ウヒマシの者ハ此句ク讀トウよて文の意味コを解ゲし得ケるかりハ假令カトハバ

外史氏曰。吾讀舊志。志見鳥羽。帝時數下。制符禁諸州武士屬源平二氏。曰木權之歸

將門也。其在此時歟。

かど句ク讀トウを誤アヤマりシらバ強シヒて文字ジをバ讀ヨミしりとも文ブンの意味コ解ゲし難ガタかるハ一ナホ猶ソノ其机ツクエ上エよ何ナニる書シヤを繕ヒロびてニよ日本地誌略卷之二

第一葉

東南ハ美濃伊勢伊賀ニ接シ、西北ハ山城丹波若狹越前ニ界ス、滋賀高島伊香淺井坂田犬上愛智神崎蒲生野洲栗本甲賀ノ十二郡アリ、



右側の(一)ハ句かり中の(一)ハ讀かり之を

東南ハ美濃伊勢伊賀ニ接シ西北ハ山

城丹波若狹越前ニ界ス滋賀高島伊香

浅井坂田犬上愛智神崎蒲生野洲粟本

甲賀ノ十二郡アリ、

斯カく猥ニ句讀クを附ツけツらバ文意解ゲ難ガク

るべし

又句讀クの外ホ文義解ゲ易ヤキニわカシメ送假名オウリガナと

ウヘリトを附ツけ置オくカリ假令タトヘバ

〔學文〕

右側ミギかハるハ送假名オウリガナ左側ヒダリかハるハかへりとい

ふモのカり〔之ハ〔と讀ヨむニ字ノよシて〔

ハ左ヒダリよモ戻モるといふ義ワケ〔ハ右ミよモ戻モるといふ

義ワケかハり又三つを四つをかへりて讀むハ上

中下ミ或アハ一ヒ二ニ三ニ四ニ甲乙丙丁等ナドの文字ナを本ホ

文モンの左側ヒダリよ添ツて以て誦ヨム詠ウタ便タヨ以テ之ヲを訓點クニテン

を施ホ以テといふ

又世俗セゾク湯桶讀ユヅクヨミ合羽讀カッパヨミと唱ナふる所りニ字連ツラ

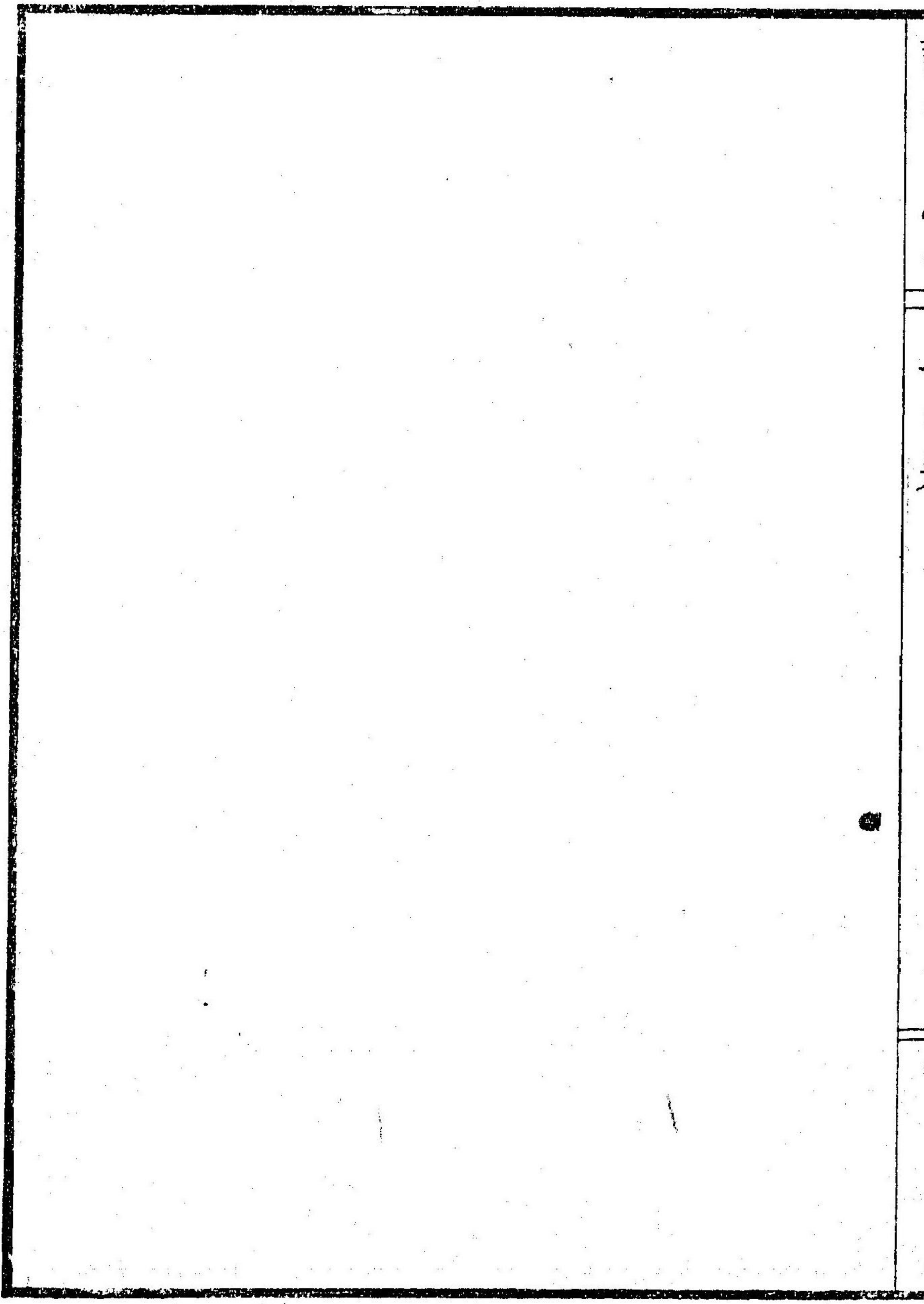
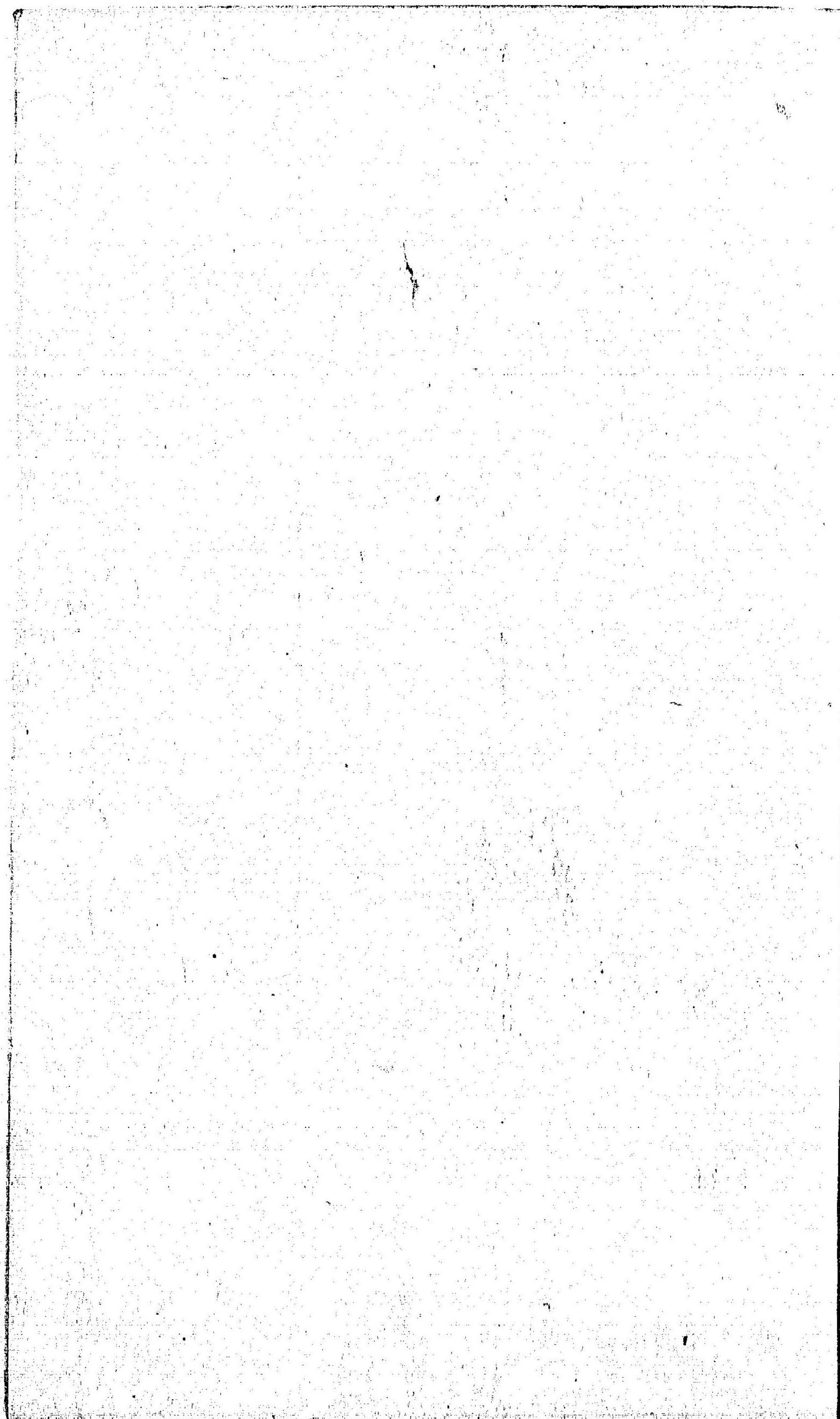


れるを上を訓よて讀之下を倍よて讀むハ  
 湯桶讀かり上を音よ下を訓よ讀むハ台羽  
 讀かり郡縣名姓氏かどよハ何るこくかれ  
 ど漢籍を讀むよハ兩かぐら之を忌むべき  
 かり  
 さて又漢文を解し得るよ至らバ始ハ無點  
 の漢文よ句讀を附け次は訓點を施し又大  
 家の名文を假名交りよ書下しそを原書の  
 如く漢文よ復しかどして漸次文法を學ぶ

べー

又漢籍の儒經史傳を讀むよハ漢音を用お  
 佛經を讀むよハ吳音を用お日本の書籍を  
 讀むよハ漢音と吳音と並用するハ我國古  
 來よりのからハ一かり漢音と吳音との差  
 別ハ一二を擧てしらすものからねバ字  
 典字彙玉篇かどいふ字書よよりて漸次之  
 を心得べきかり  
 詞のをつき一の巻 終





諸  
の  
事  
一  
の  
類



